

階級、人種、エスニシティ：マルチカルチュラリズムとJack and the Beanstalk

谷口, 秀子
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/1654378>

出版情報：言語文化叢書. 9, pp.87-102, 2004-02-20. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

階級、人種、エスニシティ

—— マルチカルチュラリズムと *Jack and the Beanstalk* ——

谷 口 秀 子

1. マルチカルチュラリズムとおとぎ話

多様な人種とエスニシティが存在する国々において、多様性を尊重することの重要性が認識されたのは、決して最近のことではない。しかしながら、このような多様性を奨励する文化多元主義 (cultural pluralism) の理念のもとでも、実際には様々な差別構造が存在した。そのため、この状況を改善するために、すべての人々に平等な権利を認めた上で、教育や仕事の場において、人種、エスニシティ、宗教、性別、性的指向、言語などに見られる、人々間の多様性を尊重する多文化主義 (multiculturalism) の動きが、近年、アメリカ、イギリス、カナダなどの国々で盛んになっている。⁽¹⁾

よく言われるように、おとぎ話は、その成立過程や再話者の意図によって、男性、白人、中産階級、キリスト教徒中心の因習的な価値観を提示していることが多い。そのため、おとぎ話は、現代においては、文化の多様性を尊重するという理念に従って、様々な視点から語り直され、多様な価値観を提示することになった。その中心的なものは、1970年代以降のフェミニストの作家による、女性の視点からのおとぎ話の語り直しであり、これは、一定の成果をあげている。また、女性の視点以外にも、女性と同じく、それまで、白人のキリスト教徒の中産階級の男性の価値観が主流であった社会における「他者」に甘んじていた人種の人々や文化などに配慮したおとぎ話の語り直しも珍しくなくなっている。

現在、多文化主義教育の現場において、おとぎ話が教材として用いられることが少なくない。例えば、英米の小学校では、もとのおとぎ話と語り直されたおとぎ話を読み比べて、ジェンダーをはじめとする多様な文化の問題を考える授業が盛んである。小論では、おとぎ話の *Jack and the Beanstalk* (『ジャックと豆の木』) と『ジャックと豆の木』を多文化主義の立場から語り直した作品とを比較検討し、文化の多元性とおとぎ話について、階級、人種、エスニシティの観点から考察する。⁽²⁾

2. おとぎ話としての *Jack and the Beanstalk*

2. 1. Jacobs の再話による *Jack and the Beanstalk*

イギリスに起源を持つ *Jack and the Beanstalk* (『ジャックと豆の木』) は、『シンデレラ』や『白雪姫』と並んで、現在、最も親しまれているおとぎ話のひとつである。現在広く読まれている『ジャックと豆の木』は、Joseph Jacobs の再話によるものであり、1890年に出版された *English Fairy Tales* に収録されている。この本は、Puffin Books や Everyman's Library の一冊にも加えられ、現在でも多くの人たちに読まれている。また、『ジャックと豆の木』の物語は、絵本としても数多く出版されているが、やはり、Jacobs による再話を下敷きにしていることが多い。このため、小論では、一般的に知られている『ジャックと豆の木』として、Jacobs の再話による『ジャックと豆の木』を用いる。⁽³⁾

『シンデレラ』などの、女性が主人公の物語の場合、最も重要視されるのが主人公の美しさであり、彼女の従順さや忍耐が賞賛されるべき美德とされる。また、多くのおとぎ話のヒロインは、自分の力で苦境から逃れるのではなく、誰かが助けてくれるのを待つばかりの受け身の女性であることが多い。彼女たちの到達点は、ほとんどの場合、結婚であり、その結婚は、理屈抜きに、未来永劫に続く幸せを彼女と夫にもたらすものとされる。

『ジャックと豆の木』の主人公は、男性である。男性が主人公のおとぎ話の場合、主人公の容姿や性格はあまり問題にされず、主人公は、自分の行った行為によって評価される。男性の主人公は主体的に行動し、多くの場合、その行動の報償として美しい女性との結婚が用意される。この場合、彼にとっての到達点は、女性の場合とは違って、結婚ではなく、社会での成功や自己実現や経済的および階級の上昇である。⁽⁴⁾

『ジャックと豆の木』にも、上で述べたような男性を主人公とするおとぎ話のパターンが当てはまる。女性の主人公の場合とは異なり、Jack (ジャック) の容姿には全く言及がない。また、女性の場合は、性格の良し悪しや積極性や行動力の有無が聖女であるヒロインと悪女(魔女)である悪役の女性とを分ける要素となっているが、このような性格についての言及は、ジャックの場合、なされていない。ただ、ジャックが怠惰で愚かであるということが語られるのみである。

物語の出だしの部分で、ジャックは、愚かで、教養もない人物として強く印象づけられる。ジャックの愚かさは、雌牛を豆粒と交換する場面だけではなく、その前の、生活の糧である雌牛が乳を出さなくなった場面にも表れている。この場面で、ジャックと母親は、収入の手段を失い、途方に暮れる。ジャックは、自分が仕事を見つけに行くからと言って母親を慰めようとする。しかしながら、ここで、母親が、ジャックがこの前も仕事を見つけようとしたが誰も雇ってはくれなかったことに言及し、ジャックの無能さや怠惰さが暗に示される。ジャックは、それ以上の対策を積極的に考えることはなく、母親の方が、雌牛を売ってそのお金で店か何かを始めることを提案し、ジャックは、母親の提案に従って、

雌牛を売りに行くことになる。一般的に言って、おとぎ話の男性主人公は、知恵が回る賢い人物が多いのであるが、ジャックに関しては、生活に行き詰まった時に、主体的に打開策を思いつく知恵を持ち合わせていない主人公として描かれているのである。

ジャックの愚かさは、奇妙な老人の言葉に乗せられて、この大切な雌牛 (Milky-white) を、豆の粒と交換する場面でさらに強調される。この場面でジャックは、あまりにも愚かなため、老人の策略に乗せられて、まんまと雌牛をだまし取られているように見える。「豆粒がいくつあったら5粒になるか知ってるかい？」(“I wonder if you know how many beans make five.” (p. 66)) という馬鹿げた質問に、ジャックは「両手に2粒ずつ、口の中に1粒」(“Two in each hand and one in your mouth.” (p. 66)) と得意満面に答える。老人の「お前はとても頭がいいから、雌牛とこの豆とを交換してやってもいいぞ」(“As you are so sharp, I don't mind doing a swop with you — your cow for these beans.” (p. 66)) という言葉に、ジャックは、少しはいぶかしく思ったものの、老人の巧みな話術によって、それが魔法の豆であると信じてしまい、雌牛と豆を交換してしまうのである。このようなジャックの愚かさは、帰宅後、母親によって厳しく糾弾される。母親は、食べるものが何もない状態でこのような馬鹿げた行為を行ったジャックを「馬鹿」、「うすのろ」、「大まぬけ」(“a fool”, “a dolt”, “an idiot” (p. 67)) という言葉を使ってなじり、豆を庭に投げ捨てるのである。

ジャックの愚かさについての描写や言及は、翌朝、豆の木が天まで伸びて以降、一切行われなくなる。目を覚ましたジャックが、豆のつるが天まで届くほど伸びているのを知ると、物語の語り手は、「あの男は、やはり、本当のことを言っていたのです」(“So the man spoke truth after all.” (p. 67)) と述べて、老人の言ったことが真実であったことを強調する。ここで、ジャックがあまりにも愚かなために、「魔法の豆」(“magic beans”) であると信じてしまったことが、結果としては、正しかったということになるのである。

老人の豆が本当に魔法の豆であったことがわかった時点から、『ジャックと豆の木』の中に見られる価値観に逆転が起こるようになる。雌牛と豆を交換するほどの愚か者のジャックが豆の木を登り切った雲の上にある大男の家で示す勇気と機転は、それ以前のジャックの愚かさを微塵も感じさせはしない。すなわち、だまされて雌牛と豆を交換するほどの愚か者であるジャックと豆の木を上った雲の上にある大男の家に着いてからのジャックには、別人と思われるほどの大きな隔たりがあるのである。ジャックは、大男の夫婦を前にすると、雌牛と豆を交換した時に見せたような愚かな様子を見せないどころか、賢い知恵と状況判断力を発揮するのである。

おとぎ話の定石ではあるが、この天上に住む大男は、何の説明もなく、「人食い鬼」(“ogre” (p. 68)) と断定されている。大男の残虐で非道な様子は、人食いへの言及によって、繰り返し強く印象づけられる。例えば、大男の家で食事をねだるジャックに対して、大男の妻は、夫は人間の男の子が大好きな人食い鬼であるから、すぐに逃げるようにと忠告する。

(“My man is an ogre and there's nothing he likes better than boys broiled on toast.

You'd better be moving on or he'll be coming." (p. 68)) また、大男が、隠れているジャックのにおいを嗅ぎつけて口にする、「イギリス人の血のにおい／生きていようと死んでいようと／そいつの骨をパンにすり込んでやる」⁽⁵⁾ (*"I smell the blood of an Englishman, / Be he alive, or be he dead, / I'll have his bones to grind my bread."* (p. 68)) という言葉は、人間の肉を食べて残った骨までも食い尽くすという、大男の残虐性と非人間性をさらに強調する。大男の残酷非道な食人癖は、ジャックのにおいを嗅ぎつけた大男から彼を守るために、大女が言及する、大男が昨日食べた人間の男の子の話によって、より具体的に成り、大男の非人間性がさらに強調される。 (*"Or perhaps you smell the scraps of that little boy you liked so much for yesterday's dinner."* (p. 68))

大男が金貨を数えながら眠ってしまうと、ジャックはオープンからこっそりはい出して、金貨の袋を奪って逃げる。豆の木を伝って家に着くと、ジャックは母親に、これまでのいきさつを語り、金貨を見せ、自分が雌牛と交換した魔法の豆の威力を誇らしげに語る。

(*"Well, mother, wasn't I right about the beans? They are really magical, you see."* (p. 68)) この場面において、ジャックと母親の力関係は完全に逆転し、もはや、ジャックは、母親にしかられる愚か者ではない。この後、母子のうち、物語の中で言葉を発するのはジャックのみで、この場面を境に、母親は一切発言をしなくなるのである。

大男の家へのジャックの再度、再々度の訪問は、ジャックの冒険心と同時に、彼のとどまることを知らない食欲さを示している。ジャックは、大男の宝物を奪うという明確な意図を持って豆の木を登っていくのである。大男の家から戻ってしばらくすると、奪った金貨は底をつき、ジャックはもう一度豆の木のとっぺんまで行って運を試そうとする。ジャックは、この金貨を元手に店を始めるのでもなく、ただ漫然と金貨に頼って生活し、金貨がなくなると、新たな富を求めて、再び豆の木を登るのである。

ジャックは、もはや以前の愚かなジャックではない。大男の妻が再び表れたジャックを見て、以前金貨の袋を盗んでいった男の子ではないかと疑った時には、素早い機転を利かせて話をはぐらかし、事なきを得る。大男の家では、前回と同じことが繰り返され、大男が寝ている間に、ジャックは、今度は金の卵を産む雌鶏 (*"the hen that lays the golden eggs"* (p. 70)) を盗んで、家に帰る。雌鶏は、ジャックが卵を産めというたびに、次々と金の卵を産み、彼は富を得るのであるが、ジャックはこれに満足せず、ジャックのさらなる食欲さは、彼を再び豆の木に登らせるのである。 (*"Well, Jack was not content, and it wasn't long before he determined to have another try at his luck up there at the top of the beanstalk."* (p. 70))

貪欲なジャックは、三度目にはさらに機転を利かせる。直接大男の家には行かず、大男の妻が水くみに出かけた間に家に入り込み、今度はオープンではなく、大がまの中に隠れるのである。大男と妻が戻って来て、ジャックのにおいを嗅ぎ取り、金貨と金の卵を産む雌鶏を盗んだ男の子がまた来たのではないかと、オープンの中を探すが、ジャックは、大がまの中にいたため、難を逃れる。ジャックは、大男が眠りこんでしまっている間に、今

度は金の豎琴 (golden harp (p. 71)) を盗もうとするが、豎琴が「ご主人様!ご主人様!」 (“Master! Master!” (p. 71)) と大声で叫んだため、大男に追いかける。ジャックは、豆の木を伝い降りて家の近くまで逃げ帰ると、再び知恵を働かせ、斧で豆の木を切り倒し、豆の木を下っていた大男を死に至らしめる。

『ジャックと豆の木』の結末において、ジャックが経済的に大変豊かになったこととお姫様と結婚したことが語られる。持ち主の大男がいなくなったため、宝物は完全にジャックのものとなる。ジャックと母親は、ジャックが持ち帰った金の卵を産む雌鶏と豎琴を使って大金持ちになり、ジャックはついにはお姫様と結婚して、生涯幸せに暮らす。ここで強調されているのは、ジャックの社会的な成功とその報償としてのお姫様との結婚という、社会階級の上昇なのである。

「ジャックと母親は、大変金持ちになりました。そして、ジャックは、立派なお姫様と結婚して、ふたりはいつまでも幸せに暮らしました」 (“Jack and his mother became very rich, and he married a great princess, and they lived happy ever after.” (p. 72)) という『ジャックと豆の木』の結末は、『シンデレラ』などのおとぎ話において、ヒロインが王子に見初められて結婚した後の、「ふたりはいつまでも幸せに暮らしました」 (“and they lived happily ever after.”) という結末の常套句を思い起こさせる。ここで、貧しいジャックは、冒険の報酬として、金貨と金の雌鶏と金の豎琴を手に入れ、経済的に豊かになる。このジャックの経済的な上昇は、ついには、立派なお姫様と結婚することによって、社会的な上昇、すなわち、社会階級を上ることへとつながるのである。

このようなジャックの冒険物語は、大男が絶対的な悪であり、ジャックが絶対的な善であるという理解がなければ、単なる搾取と略奪の物語になる危険性があり、帝国主義時代の植民地における先進国による搾取の構造と重なる恐れすらある。その危険を防いでいるのが、大男の許されざる食人癖なのである。その食人癖こそが、ジャックと大男を善と悪に隔てており、大男を絶対的な「他者」に仕立て上げ、ジャックが大男の宝物を奪い、さらには命までも奪うことを正当化する根拠となっているのである。

2. 2. 低年齢児向け絵本の *Jack and the Beanstalk*

『ジャックと豆の木』は、今日でも絵本の形で数多く出版されている。ほとんどのものは、Jacobs の『ジャックと豆の木』の物語とほぼ同じ筋である。イギリスで低年齢の子どもを対象に出版されている First Fairy Tales (初めのおとぎ話) シリーズもそのうちのひとつである。

「初めのおとぎ話」シリーズの『ジャックと豆の木』は、基本的には、Jacobs の『ジャックと豆の木』を踏襲しているが、時代の違いや低年齢の子ども向けということもあり、多少の変更が加えられている。ジャックが雌牛と豆を取り代える場面では、市場に行く途

中で出会った男は、ジャックに対して、「豆を蒔けば、つるが天まで伸び、その豆の木を登っていくとたくさんのお宝が手に入る」(“If you plant them[the beans], they’ll grow to the sky. Then you can climb up and get lots of treasure!”)⁽⁶⁾と伝え、ジャックが宝物を手に入れることが当然であるという印象を与えるようになっている。

また、Jacobs の『ジャックと豆の木』では強調されていたジャックの愚かさについては、ここではあまり強調されない。豆の木を登った後のジャックの行動や大男と大女の様子については、若干の変更はあるものの、Jacobs の再話と概ね同じである。この「初めてのおとぎ話」シリーズの絵本においても、大女の「うちの旦那は大男だよ。朝ご飯には人間の男の子を食べるんだよ」(“My husband is a giant. . . and he eats boys for breakfast.” (p. 13)) という言葉や、大男がジャックのにおいを嗅ぎつけて「イギリス人の血のにおいがする」(“Fee fi fo fum! I smell the blood of an English man!” (p. 15)) と言うことなどによって、人間を食べる大男の邪悪さと恐ろしさが印象づけられている。もちろん、低年齢の子ども向けということもあり、Jacobs 版に見られる残酷な記述は削除されている。

さらに、ジャックが雌牛を豆と交換する時点で、宝物が手にはいることが当然の結果と考えられているので、Jacobs の作品に対して現代の読者が感じ取るジャックの食欲さと略奪のイメージが弱まっていると言える。このような配慮は、物語の結末にも見られ、Jacobs の『ジャックと豆の木』にあるような、ジャックと母親が、金の卵を売ったり、人々からお金をとって金の豎琴を聞かせたりして、大金持ちになったという記述も、お姫様と結婚したというエピソードもなく、あくまでも、貧しくて食べるものもなかった親子が、金の卵を産む雌鶏と金の豎琴のおかげで、幸せになったということが強く印象づけられるようになっているのである。

3. *Jack and the Beanstalk* と社会階級

よく知られている『ジャックと豆の木』では、ジャックは貧しく愚かな少年として物語に登場する。もっとも、ジャックは、大男の家に着いた途端、別人のような機転や知恵を示すものの、基本的には、無教養な愚か者として設定されている。

貧しいジャックが富を得て、最後にはお姫様と結婚するという『ジャックと豆の木』の物語は、ある意味では、ジャックの社会階級の上昇の物語と読み替えることも出来るであろう。また、ジャックは、豆の木を登って冒険を重ねるごとに、より機知に富むようになっているが、これは、彼が金貨を手に入れたり、金の卵を産む雌鶏を手に入れたりすることによって、それまでの、その日の食べ物にも事欠く状態から脱して、段階的に裕福になっていくことと無縁ではない。このように考えると、貧しく階級の低い者に対する『ジャックと豆の木』というおとぎ話を持っている階級的な固定観念が表れてくる。すなわち、貧しく階級の低いジャックは、ステレオタイプの無教養な愚か者に描かれているのであ

る。すなわち、今日の夕食にも事欠くような貧しい状態のジャックは、この上もなく愚かに描かれるが、ジャックが経済的に裕福になっていくに従って、彼の知恵もだんだん増していくのである。大男の家への最後の侵入の場面では、ジャックは、大女の目を盗み、いつもとは違う場所に隠れるという機知を披露するが、ここには、作品冒頭の愚か者のジャックの面影は微塵も感じられない。その後、ジャックは、大男を殺して金の卵を産む雌鶏と金の豎琴を確実に自分のものとし、それらを使って大金持ちになって、立派なお姫様と結婚することによって、経済的な上昇のみならず、階級的な上昇をも果たすのである。

階級制度が現在も残存しているイギリスの小説の中には、ピラミッド型の階級社会のはしごをのぼって、階級の上昇を果たした者たち (class climbers) を主人公にした作品が少なくない。Charles Dickens の *Great Expectations* (『大いなる遺産』) や、William Golding の *The Pyramid* (『ピラミッド』)、Jeffrey Archer の *As the Crow Flies* (『チェルシー・テラスへの道』) は、その例である。階級を登っていく人物を描く小説には、階級的な上昇に至る過程を一種の主人公の成長と捉える教養小説や、彼らが急激に階級を駆け上がるために犯さざるを得なかった非人間的な行為やそれに伴う人間性の阻害をテーマにした小説がある。このような視点に立てば、『ジャックと豆の木』におけるジャックも、まさにそのような階級上昇者のひとりであると言えよう。

『ジャックと豆の木』から階級的なステレオタイプを排除しようとしていると思われる作品もある。アメリカの Richard Walker による *Jack and the Beanstalk* (『ジャックと豆の木』) においては、ジャックの貧しさは怠惰や愚かさとは結びつけられてはいない。それどころか、この絵本の冒頭において、語り手は、ジャックが決して怠け者ではないことを強調するのである。

I'm not going to start by saying that Jack was lazy. When there was an adventure in the offing, he was not lazy at all. But most of the time, he just did a little bit of this and a little bit of that. (7)

さらに、ジャックも母親も貧しいことを、あまり気に病んでいないことが語られ、食べるものがなくなった時も、母親は、絶望に打ちひしがれるのではなく、現実を直視して、ジャックに雌牛を売りに行くことを命じるのである。この時、母親は、雌牛を高い値段で売るようにジャックに指示するのもしない。また、ジャックが怠け者ではないことは、彼が、翌朝夜明けと同時に起きて市場に向かうことにも表れている。

ジャックは、一般的な『ジャックと豆の木』と同様、雌牛を豆と交換してしまうのであるが、その原因となったのは、一般的な『ジャックと豆の木』にあるようなジャックの愚かさではなく、魔法に対する強い興味であることが示される。すなわち、ジャックは、無教養なためにだまされたのではなくて、子どもにありがちな、あまりにも強い魔法に対す

る興味のせいで、雌牛を豆とを交換してしまうのである。（“Well, there was nothing Jack loved better than magic, so he handed over Daisy, took the beans and hurried home.” (p. 9)）ジャックは、奇妙な身なりをした男が、雌牛と交換しようとする時も、冷静に母の言葉を思い出し、「雌牛と交換に何をくれるの？」（“What will you give me in exchange?” (p. 9)）という対応をする。このような賢いジャックも、この男の魔法の豆（“magic beans”）と交換してあげようという言葉に、魔法に対する興味と好奇心を刺激され、雌牛と交換してしまう。すなわち、作者は、ジャックの貧しさを彼の知性や教養のなさに結びつけることをしないで、雌牛と豆との交換の理由を子どもらしい好奇心に還元しているのである。従って、この『ジャックと豆の木』の物語には、Jacobs の『ジャックと豆の木』には見られる階級的なステレオタイプが見られないのである。

このように、ジャックの階級の低さが知性の低さに結びつけられていないため、Walker による『ジャックと豆の木』においては、筆者が先に指摘した、一般的な『ジャックと豆の木』に見られる、豆の木を登る前のジャックと大男の家（Walker 版では、「城」）に着いて以降のジャックとの間の大きな隔たりは、顕在化しない。ジャックは、一般的な『ジャックと豆の木』に描かれている以上に、賢い少年に描かれており、大きくて重い金貨の袋を地上に持ち帰るためのロープを使った工夫など、彼の知性が際だつようになっている。しかしながら、ジャックは、大男の前で、急に賢く立ち回るようになるのでも、経済的に豊かになるにつれて機知に富むように変化していくのでもない。ジャックは賢い少年であり、豆の木を登る前も後も、ジャックの賢さと機敏さは変わらないのである。

伝統的な『ジャックと豆の木』においては、金貨に飽きたらずに、金の卵を産む雌鶏や金の堅琴を盗み出すジャックの食欲さは否定しがたいが、Walker の『ジャックと豆の木』においては、ジャックの食欲さは、あまり強く意識されないようになっている。大男の食人癖や残虐性が強調されていることに加えて、再び城に現れたジャックが金貨の袋をもうひとつ盗もうとするのを見た金の卵を産むガチョウと召使いの女性の態度は、ジャックが大男の宝物を盗むのを正当化するのに役だっている。城での生活がつらく、大変陰気な顔をしているガチョウ（“a huge, very gloomy-looking bird” (p. 24)）は、自分も一緒に連れて行ってくれるようにジャックに頼む。（“As he crept past the giant, the goose looked up hopefully and whispered, ‘Can I come too? I hate it up here. You wouldn’t need to take the sack then. I could lay you as many golden eggs as you want.’” (p. 30)）また、ジャックに親切にしてくれた老婦人も、おそらくガチョウと同じ理由で、自分もジャックについて行きたいと告げるのである。

ジャックの知恵は、豆の木を伝って追いかけてくる大男から逃れるためにも、大いに発揮される。ガチョウを抱いた老婦人と金の堅琴を持ったジャックが無事に地面に着くと、ジャックは豆の木を力の限り引っ張ってから、一気に手を離す。豆の木はパチンコのようにはね、大男は豆の木からはじき飛ばされて宇宙に飛んでいく。ここには、一般的な『ジャックと豆の木』の、斧で豆の木を切り倒し大男を殺す結末とは違って、斧を使わず、豆

の木をしながら反動を利用するという、ジャックの知恵のすばらしさを示すと同時に、一般に「大男殺しのジャック」(Jack the Giant Killer)と言われるジャックの殺人のイメージを払拭しようとする意図が見られる。そのため、大男は、はじき飛ばされてまだ宇宙にいたることになっているのである。(“He soared away into space and was never seen again. And, as far as I know, he’s still there.” (p. 37))

おとぎ話のジャックが、物語の結末において、大金持ちになり、お姫様と結婚して階級的に大幅な上昇を果たすのに対して、Walkerのジャックには、階級的な変化は感じられない。

The old woman went inside to make a pot of tea. Mom put the golden harp on the kitchen dresser, and Jack made the magic goose a special hut. He put the sack of gold in the cellar and took out a coin whenever he needed to buy something. And the last time I went to visit, the harp played jigs and reels, so we all had a merry dance. (p. 38)

ここには、ジャックと母親と城から来た老婦人とガチョウのほのぼのとした幸せな暮らしが描かれており、おとぎ話のジャックに見られる、飽くことのない食欲さは感じられない。また、ガチョウはペットとしても大切にされ、豎琴は、人に聴かせて金を取るためではなく、生活を楽しむために用いられている。ここには、Jacobsの『ジャックと豆の木』に感じられるふたつのジャック像の乖離もない。また、彼が大金持ちになったという記述もなく、お姫様と結婚したということもない。そのため、『ジャックと豆の木』に見られるようなジャックの露骨な階級の上昇が感じられないのである。ジャックは、貧しいからといって無教養でも愚かでもなく、成功が社会階級の上昇によって象徴されることもないのである。(この作品が、イギリスほどのあからさまな階級制度の存在しないアメリカの作品であることとも多少の関係はあるであろう。)このように、怠惰で愚かなジャックを働き者で賢い少年に書き換えたこの作品は、結果として、おとぎ話の『ジャックと豆の木』の根底に流れていた階級的な固定観念を減じることにもなっているのである。

4. 人種とエスニシティ : *Giants Have Feelings, Too*

『ジャックと豆の木』は語り手によって語られる物語である。この語り手は全知の視点を持った語り手ではなく、語り手の視点の範囲は限定されている。すなわち、語り手は、ジャックの登場しない場面について語ることは一切ないのである。そのため、『ジャックと豆の木』という物語の真の語り手は、ジャックではないのかという疑問が生まれてくる。すなわち、『ジャックと豆の木』は、ジャックが、客観的な語り手を装って、事実を主観的

に、自分に都合良く語っている物語である可能性すらあるのである。『ジャックと豆の木』は、階級上昇を果たした主人公が階級上昇の原点となった自らの青春時代を語る形式の、『ピラミッド』などの一人称の語り小説において、語り手が、真実を隠蔽するために自分にとって都合のいいことばかりを述べ、事実を改ざんし編集して、もうひとつの物語を作り上げて、自らの過去の行為に対しての罪の意識を減じようとするのと同じ構造の物語であると言えるかも知れない。上に述べたように、『ジャックと豆の木』には、階級上昇的なニュアンスもあることを考えれば、これはあながち的はずれではないであろう。

後のジャックの出世は、彼が大男から奪った宝物によるものである。語られる物語の中で、ジャックは、残虐非道な人食いの大男から宝物を奪い、大男を退治する。ジャックがこのような略奪と殺人を許されるのは、相手が人間の男の子を食べる食人鬼であるからであり、この食人鬼を退治することは、社会正義を守ることにもつながると考えられるからである。ジャックの行為が正当化されるためには、大男は、人間社会を脅かす絶対的な悪でなければならず、その悪は、ジャックが代表することになる人間の世界に対して、絶対的な脅威を与えるものでなければならないのである。

このような、自分とは異質な者を略奪の対象としたり、悪と見なしたりするやり方は、帝国主義の時代に当時の先進国が第三世界で用いた言説でもある。現在でも、多様な人種、文化、価値観を尊重しあうことは、必ずしも容易ではなく、そのため、アメリカやイギリスなどでは、あらゆる人の平等な権利を保障した上で、多様な価値観を尊重するための多文化主義教育が行われているのである。アメリカやイギリスでおとぎ話の語り直しが盛んに行われているのは、そのような教育的な目的もあると考えられる。

『ジャックと豆の木』を題材に、そのような視点のひとつを提供するのが、Granowskyによる *Giants Have Feelings, Too* (『大男にだって感情はあるよ』) である。この物語は、『ジャックと豆の木』がジャックの視点によって語られた虚偽の物語であるとして、大男の妻の視点を通して、大男の側からこの物語を語り直す設定になっている。ここでは、同じひとつの事実が、視点となる語り手の違いによって、どれほどの隔たりを見せるかが示されているのである。

『大男にだって感情はあるよ』は、大男の妻の視点を通して、ジャックと豆の木の物語を提示することにより、『ジャックと豆の木』に述べられている、大男はその食人癖に象徴されるような絶対的な悪であり、一方ジャックは絶対的な善であり、邪悪な大男を退治した勇者であるという前提をひっくり返してみせる。大男の妻が過去を振り返って語る形式のこの物語においては、大男は、『ジャックと豆の木』におけるのとは対照的に、人間性豊かで穏やかな人物として描かれており、一方ジャックは、老夫婦の蓄えを盗み出す悪人として描かれている。この絵本の表紙には、金の卵を産む雌鶏を優しく穏やかな表情で見守る老人の顔が描かれている。いろいろな絵本における『ジャックと豆の木』における人食いの大男が、例外なく邪悪で凶暴な表情に描かれるのに対して、この絵本の大男は、優し

い表情をしており、表紙の絵からは、この老人が『ジャックと豆の木』の大男であることがわからないくらいである。

大男の妻の視点から語られる物語は、ジャックを非人間的な略奪者として糾弾する。妻は、物語の冒頭で、自分たちはジャックに親切に接したにもかかわらず、ジャックが夫婦の財産を奪い、大男にひどいけがを負わせるという裏切り行為に及んだのは、彼らが普通の人間ではなく巨人であるということだけが理由なのだと訴えるのである。

I am sure that the rest of you people living down below are very nice. But that boy, Jack, is something else. After I was so kind to him, he stole from us, and he hurt my husband. *All because we are giants!* That's no reason to take our treasures or to make my husband fall on his head. See what you think. ⁽⁸⁾ (イタリックは筆者)

この物語においては、『ジャックと豆の木』で描かれる大男像とは全く対極にある、優しく人間味あふれる大男の姿が描かれ、『ジャックと豆の木』における残虐非道な人食いの大男は、ジャックが自分の行為を正当化するために作り上げたものである可能性が暗示される。『大男にだって感情はあるよ』に登場する大男夫妻は、穏やかで優しい表情をした子ども好きの老夫婦であり、子どもたちが成人した後、ふたりで平穏に暮らしている。また、ふたりが所有している金貨は、ふたりが日々の生活を切りつめ、老後の生活に備えて蓄えたものであり、誰かから奪ったものでは決してない。金の卵を産む雌鶏や金の豎琴にしても、同様である。

さらに、Jacobs の『ジャックと豆の木』をはじめ、それにもとづくいろいろな版の『ジャックと豆の木』においては、大男は、“ogre” (人食い鬼) あるいは“giant” (大男) と呼ばれ、決して名前を与えられることはない。しかしながら、妻の視点で描かれる『大男にだって感情はあるよ』においては、大男は、Herbert (ハーバート) という名前と呼ばれている。この時、『ジャックと豆の木』においては、感情を共有することの出来ない非情な人食い鬼という絶対的な「他者」であった大男が、名前を与えられることによって、ひとりの個人として物語の中に現れるのである。また、大男の名前が、怪物めいた名前や英語話者である読者にとって親しみのない名前ではなく、英語の名前になっていることにも、大男が、身体の大きさは違っても、読者と同じ感情を持つ人間であることが示唆されていると思われる。

大男ハーバートの妻の視点を通して描かれるジャックの姿も、『ジャックと豆の木』のジャックとはずいぶん異なっている。大男の妻は、ジャックの痩せておなかをすかせた様子を見て、ジャックを家の中に招き入れて食事を食べさせる。この後、ジャックは、大男が帰ってくる足音を聞きつけると、おかしなことに、自ら進んでオープンの中に姿を隠す。妻は、ジャックのこの変わった行動を目にして違和感を覚えるものの、ジャックが良から

ぬことを考えているとは思いません、彼が恥ずかしがり屋であるため、オープンの中に隠れたのだと善意に解釈する。（“I should have known right then that Jack was up to no good. I just thought the boy was shy. But he wasn't shy about taking what he wanted!” (p. 5)）その後ジャックが行った3つの略奪行為などを考えると、好意を示した大男の妻とその好意を裏切って略奪の限りを尽くすジャックとが、明らかな対比として、読者に印象づけられるのである。ジャックは、大男のハーバートがうたた寝をしている間に、オープンからこっそりはい出して、彼が数えていた金貨を盗み出して家に逃げ帰る。『ジャックと豆の木』で、ジャックが人食いの大男に食べられないようにするために、大男の妻がジャックをオープンの中にかくまうエピソードは、『大男にだって感情はあるよ』においては、盗みをはたらく目的で身を隠すためのジャックの意図的な行為として描かれているのである。

ジャックのなした悪は、大男が人食鬼ではなく、優しい善人として描かれており、さらには、ジャックが奪った金貨などが、大男夫婦が年をとって働けなくなった時のために、日々の暮らしの中で蓄えていたもの（“He keeps a close eye on our savings. We have to save up for the day when we can't work.” (p. 6)）であることが、語られることにより、より一層罪深いものに思われるのである。また、ジャックが宝物を奪ったことを確信したハーバートと妻が、それでも人間に対する信頼を持ち続け、「そのうち出てくるだろう」「きっと返しに来るだろう」と考えるところからも、大男が非人間的な悪であり、ジャックは絶対的な善であるという、『ジャックと豆の木』における前提が意味をなさなくなるばかりか、大男が善で、ジャックが悪であるというように逆転すらしてしまうのである。

『ジャックと豆の木』においては、ジャックは、飽くことのない貪欲さのために、再び大男の家を訪ねることが示されている。『大男にだって感情はあるよ』においても、大男の妻の目を通して、ジャックの再訪の不自然さが描き出されている。妻の目には、ジャックは以前とは違って、空腹のように見えませんが、ジャック自身はこの前と同じくらい空腹であると言う。そのため、妻は、また、ジャックを家に入れて食事を与えることにする。その際、妻は、金貨の入った袋を知らないかとジャックに尋ねるが、ジャックは話をそらして答えない。大男が帰って来る心配がすると、今回もジャックは自らオープンの中に隠れ、大男の宝物を奪う機会をうかがう。疑うことを知らない妻は、この時も、ジャックが恥ずかしがり屋であるせいでだろうと善意に解釈する。

『ジャックと豆の木』の中で大男が口にする、人間をむさぼり食う食人鬼にふさわしい「イギリス人の血のにおい／生きていようと死んでいようと／そいつの骨をパンにすり込んでやる」（“Fee-fi-fo-fum, / I smell the blood of an Englishman, / Be he alive, or be he dead, / I'll have his bones to grind my bread.” (p. 68)）という歌の代わりに、この物語においては、妻の料理のおいしさを歌った「女房の料理はうまい！うまい！うまい！焼いたものでも揚げたものでも、毎食必ず女房の作ったおいしいパイを食べるのさ」（“Fe! Fi! Fo! Fum! My wife's cooking is Yum! Yum! Yum! Be it baked or be it fried, we

finish each meal with her tasty pies!” (p. 13)) という歌が示されている。ここでも、ジャックが、大男を人食鬼という残虐非道な鬼に仕立て上げ、自分の行った犯罪行為を正当化しようとするために、歌の内容を変更して伝えた可能性が示唆されているのである。

今回ジャックが奪うのは、金の卵を産む雌鶏であるが、このあたりから、ジャックの悪賢さと貪欲さが読者に強く印象づけられるようになる。ジャックが雌鶏を盗む行為の悪質さは、夫婦のペットでもある雌鶏が産む金の卵が大男夫婦の老後の生活を支えるための蓄えとして必要なものであることが語られることによって、一層強調されることになる。

“Our little hen helps us save for the future.” (p. 14) 再び、ハーバートは、うたた寝してしまい、妻もジャックがオープンにいるのを忘れてしまっているうちに、ジャックはオープンから忍び出て、金の卵を産む雌鶏を盗んで逃げる。その姿を目撃した妻は、金貨の袋を盗んだのが彼であり、今度は、雌鶏を盗んでいったことを確信して夫に告げる。

ジャックが金貨と金の雌鶏を盗んだことを知った時の大男の返事には、彼の人間に対する信頼が表れている。

“Oh, dear,” Herbert said. “We can only hope that the boy’s mother will find out what he has done. Surely, she will make him return our things. Maybe she will even return them herself.”

“You’re right, Herbert,” I said. “When his mother brings back our gold and our hen, I’ll be here to thank her.”

“Don’t worry,” Herbert added. “Everything will work out for the best.” (pp. 18-19)

ハーバートは、「ジャックの母親が息子のしでかしたことを知ったら、盗んだ物を返すように言ってくれるだろう」「ひょっとしたら、母親が自分で返しに来てくれるかも知れない」と言って、ジャックを非難する妻をたしなめる。この場面において、人間性は大男の側にあり、彼の信頼を裏切って盗んだ物を返さないばかりか、再び宝を盗みに戻ってくるジャックには、人間性や倫理観が全く感じられない。

大男のジャックに対する信頼は裏切られる。再び訪れたジャックは、悪知恵をはたらかせてこっそりと家に忍び込み、夫婦の最後の宝物である金の堅琴を盗んで逃げる。ハーバートは、「止まりなさい！君は盗みをはたらいてるんだぞ！他人の物を盗むのは間違っているということを知らない訳じゃないだろう？」(“Stop! You’re stealing! . . . Don’t you know it’s wrong to steal?” (p. 22)) と、ジャックの不道徳な行為をいさめながら、後を追いかける。その後、『ジャックと豆の木』と同様、ジャックによって豆の木が切り倒され、大男は地面に落ちて大怪我をする。

『大男にだって感情はあるよ』に描かれている大男に対して、ジャックが行った略奪などの行為は、倫理的に許されない行為である。なぜならば、『大男にだって感情はあるよ』

には、『ジャックと豆の木』には存在していた、絶対的な悪それも人間社会を脅かすような非人道的な悪の象徴としての大男像が存在しないからである。この時、ジャックの側には、大男の宝物を奪い、大男にひどいけがを負わせる行為を正当化する理由は、何ひとつ存在しないのである。

ハーバートの妻は、以下の結末の部分において、ジャックの視点から語られた『ジャックと豆の木』の物語を問い直し、ひとつの主観的な視点からのみ語られた物語の危うさを警告する。

Now we hear that Jack and his mother live well with our gold, our hen, and our harp. *Jack says he took our things because we are mean, old giants. Well, that's not true. We were kind to that boy.*

He had no right to take what was ours or to hurt my husband. *Giants have feelings, you know. You wouldn't hurt a giant's feelings, would you?* (p. 25 ; イタリックは筆者)

『ジャックと豆の木』を大男とその妻の視点で問い直す時、ひとつの事象をジャックという一方の視点から語る場合の信憑性や客観性に対する疑いが生じる。ハーバートの妻の視点によると、人食いの大男から宝物を奪った一種の英雄物語のようなジャックの冒険は、宝物を奪ったことを正当化するために作り上げられた虚偽の物語であることになる。ふたりの語り手が、あるひとつのことについて、それぞれの物語を作る時、その真実がどちらにあるのかは、受け手にはわからない。しかしながら、『ジャックと豆の木』におけるジャックの略奪行為に対して、現代の読者が感じる居心地の悪さや植民地における先進国による搾取との連想が否定できないものである以上、大男の妻の織りなす語りは、「他者」の側の視点として強い説得力を持っているのである。

妻の語りは、ジャックが、彼らが「たちの悪い老いぼれの大男と大女」(“mean, old giants”)であったために、宝物を奪ったと称していることに異議を唱える。自分たちとは異なるというだけで、優しく善良な者たちから宝物を奪い、自分たちと違うということが、卑劣な略奪行為を正当化する言い訳となりうることの不条理を訴えているのである。また、ジャックの物語においては、自分の悪辣な行為を正当化するために、被害者である大男の側が、悪いイメージを植え付けられ、それに対する征伐の意味を込めて、ジャックの略奪と殺人の企てが正当化されるのである。このようなレトリックは、日本の『桃太郎』にも潜んでいる。鬼は、鬼であるというだけで、征伐されなければならない対象とされ、桃太郎に宝を奪われるのである。このような物語は、歴史的に見ても、ある人種や民族が、自分とは異なる人種・民族・文化を排斥したり搾取したりする際に、しばしば起こりうる話である。これは、多文化国家のような国の中において、少数の人種、民族、エスニシティの人々に対して行われる可能性もある一方、国家対国家のレベルでも起こりうるのである。

また、ジャックに対して害をなすどころか、自らの食欲さのために、親切で疑うことを知らない大男夫妻からたびたび財産を奪い、挙げ句の果ては、大けがをさせてしまうジャックの姿に、帝国主義時代の先進国による植民地における搾取と略奪のイメージが重なる。イギリスの作家 Joseph Conrad は、19世紀末に著した *Heart of Darkness* (『闇の奥』) などの作品の中で、アフリカにおけるヨーロッパによる植民地支配について、自分とは異なる「他者」であるコンゴの人々に対するヨーロッパ人の搾取と非人間性を告発した。『闇の奥』には、ヨーロッパ文化の象徴とも言える Kurtz (クルツ) が、ヨーロッパ文明とは隔絶された、当時暗黒大陸と呼ばれたアフリカのコンゴの植民地の開発に出向き、彼が自分よりも劣った「他者」と見なす現地人を前にして、彼ら相手には全知全能の神のように何でも出来るという幻想にとりつかれ、搾取と残虐行為の限りを尽くす様子が描かれている。

『ジャックと豆の木』において、この物語が前提としている西洋の中産階級の白人のキリスト教徒の男性の価値観からすると、大男は、「他者」であり、打破すべき対象であり、それゆえ、搾取し、傷つけてもかまわない存在なのである。大男が、非道で食人癖のある残酷な性格に描かれる時、それを理由にして、盗みを犯し、大男を死に至らしめるジャックは、何の非もとがめられることなく、悪人を懲らしめた英雄として、それにふさわしい3つの褒美を手にする。大男に押しつけられた非人間性は、ジャックにはみじんもないというのであろうか。この物語を、例えば、ジャックを西洋に、大男を非西洋に例えてみると、特に国や民族の利害が絡んだ場合、現在でも似たような「他者」に対する無理解や排除や敵視が存在している。人種やエスニシティをはじめする、多様性という視点を失った時、「他者」という大男は、常に作り出される可能性があるのである。

註

- (1) 戴エイカ『多文化主義とディアスポラ』(明石書店, 1999), pp. 38-39 参照。
- (2) 『ジャックと豆の木』に限らず、おとぎ話については、ジェンダーの視点からの語り直しが大きな比重を占めるが、小論では、階級と人種に焦点を当てるため、ジェンダーの問題は扱わない。『ジャックと豆の木』をジェンダーの視点から語り直した作品には、主人公のジャックを女性に置き換えた *Kate and the Beanstalk* がある。この作品については、別の機会に論じる。
- (3) 小論で論じる、一般的な『ジャックと豆の木』のおとぎ話は、以下の物語である。Joseph Jacobs, "Jack and the Beanstalk," *English Fairy Tales* (Everyman's library, 1993). なお、小論におけるこの作品からの引用は、すべてこの版により、本文中にページ数のみを記す。

- (4) ザイプス (Jack Zipes) が同様の指摘をしている。ジャック・ザイプス『おとぎ話の社会史——文明化の芸術から転覆の芸術へ——』(新曜社, 2001), p. 50 参照。
- (5) “I’ll have his bones to grind my bread.” の部分の訳出については、石井桃子 (編・訳)『イギリスとアイルランドの昔話』(福音館書店, 2002), p. 103 を参照した。
- (6) Margaret Mayo, Philip Norman, *Jack and the Beanstalk* (Orchard Books, 2002), p. 7. 小論におけるこの作品からの引用は、すべてこの版により、ページ数のみを記す。
- (7) Richard Walker, Niamh Sharkey, *Jack and the Beanstalk* (Barefoot Books, 1999), p. 2. 小論におけるこの作品からの引用は、すべてこの版により、本文中にページ数のみを記す。
- (8) Alvin Granowsky, Henry Buerckholtz, *Giants Have Feelings, Too* (Steck-Vaughn, 1996), p. 3. 小論におけるこの作品からの引用はすべてこの版により、本文中にページ数のみを記す。